

迎春 新年ご挨拶

フクタニュース200号に寄せて 代表取締役 中田 勇司

令和3年新年あけましておめでとうございます。本年も株式会社フクタをよろしく願っています。継続は力なり、「フクタニュース」も今月の新年号で200号を迎えることとなった。私自身も社長としてコラムを書くこととなり、かれこれの60回ぐらいになる。会社の様々な課題について書くわけにもいかず、何時もカーリングのことや差しさわりのないものを書いてきたつもりであるが、時々スイッチが入り、平日頃考えている思いの丈を書き綴ったこともあったかもしれない。

時にこの「フクタニュース」について、A4版一枚ながらそこそこ読み物として面白いと評価いただくことがある。社長としては嬉しい瞬間である。「フクタニュース」は月初には見事完成し取引先には送付させて頂いてきた。弊社には未だにホームページがなく、情報の発信はこのペーパーによる「フクタニュース」だけである。しかし間もなくホームページができるらしく、ある役員よりそろそろこのペーパーによる「フクタニュース」を終えてもいいのではとの話があったが、私は是非続けるべきであると思っており、このペーパーによる広報はそれなりの味があつて非常にいいと思つていて、今回は200号記念として、普段は読む側の方にも寄稿をお願いして共に紙面を作るという企画である。どんな感じに出来るか楽しみである。今後も読み手の皆様からの寄稿を大歓迎しますので、今後とも「フクタニュース」をご愛読よろしく願います。

コロナ禍で大変な世の中ですが、目前のことをしっかりと見据えてやるべきことを成すしかないと考えております。今年一年皆様におかれましてはご安全に過ごせますようご祈念申し上げます。

工夫次第で

年末安全パトロールに参加し、ある製材業の工場を見させてもらいました。全体の印象は工場も事務所も古いつくり（失礼）で老朽化うへの悩みも多かろうと思つていましたが、豈図らんや、古いものをしっかり手入れをし、必要のないものは置かないよう整理整頓が行き届いていました。また、どこに何があるのか明示され、あるべきものがなくなると見ただけでわかるようになっていました。継続してやってきた重みがあり、新しい事業所を拝見するより学びの多いパトロールでした。



永年勤続表彰

二戸商工会60周年の節目に当社から遠藤良雄さんと三上弘志さんの2名が「永年勤続表彰」をいただきました。コロナ禍を考慮して表彰式には出席しませんでした。社内で授与を行いました。おめでとうございます。



碎石手帳

年末のご挨拶にカレンダーと手帳は定番である。毎年いただくものに破砕機メーカーのアーステクニカさんからいただく「碎石手帳」がある。1980年頃から制作しているようで、手帳としてはありふれて（ゴメンナサイ）いるのだが、碎石資料編というおまけがついてくる。碎石に関わる用語や規格、法令、豆知識が載っている。業界人なら役に立つ手帳だ。30年以上も体裁を変えず継続していることに敬意を表したい。



一年毎に色が変わる

何年かこの事務所で生活していると「門前の小僧習わぬ経を読む」ごとく、文字が読めるようになった。日本語も話せるのだが、口と声帯の構造が違うため、何を言ってもミャーミャーとしか聞こえないので普段は無口である。

ある日の岩手日報1面左下「風土計」というコラムに「エッセンシャルワーカー」の話が載っていた。普段の日常を支える必要不可欠な仕事をしている人らしい。当たり前と思つていることが、実はいろいろな人に支えられているとわかった。運転手という職業も、希望したものを希望した時間に希望した数を届ける当たり前を支えているのだ。大したもんだ。年末年始は寒波襲来で大雪だというし、除雪の人も大変だろうなあ。僕は寒さを忍んで丸まっていよう。みなさんもお元気で。



今月の一言

「当たり前に感謝しよう」

200号記念企画

新春バーチャル放談 ～未来を拓くishiはどこにある？

御出席者

- ★ 岩手大学名誉教授 大塚尚寛 様
- ★ 骨材資源工学会事務局長 外園貴彦 様
- ★ 日刊岩手建設工業新聞社社長 宮野裕子 様
- ★ 日本碎石協会東北地方本部専務理事 高橋幸悦 様
- ★ 進行 フクタ 石山 洗夢



新年あけましておめでとうございます。本日は新年早々、また遠方よりお集まりいただきありがとうございます。昨年はコロナ禍の影響で多くの会合が中止となり、対面して話す機会がほとんどなかった一年でした。今日はさきやかですが、「きんじ」のそばかつけど「大吉」の焼き鳥と定番の南部美人を用意しましたので、つまみながら石にまつわるよもやま話をしたいと思います。よろしく願います。

今日は200号記念企画にお招きいただきありがとうございます。フクタニュースは2007年1月号から送ってもらったものを社内で見直し、ずーっととってあるんですよ。毎回楽しみにしています。ありがとうございます。光栄です。フクタニュースは社内報という意味もありますが、パートナーとして理解者を広められればという思いで平成16年から始めました。さて、今日は「石」と「未来」というテーマでお話をしたいと思います。石は「石ころ」と呼ばれ、ありふれたものの代表のような存在と思われていますが、どなたか身近な石の話はないでしょうか。

我が家には昔からの「漬物石」があるんですが、燃えないゴミにも出せず、何か使い道はないかと思つてるんですが・・・最近では自宅で漬物を漬けるなんてことは一夜漬けくらいしかなくなりましたからね。ホームセンターで売っているプラスチック製の重しと比べると、長年使っている漬物石は、漬物の一部として一体化した迫力がありますね。石からはなんらかのミネラルが出ているのでしようから、40mm位に破碎して一緒に漬けてみたらどうでしょう。

ミネラル豊富な「安山岩漬け」とか、健康食品ですね。ナイスです。女性の視点で考えると実用としての石より装飾としての石に興味がありますね。カナダに行ったとき「アンモライト」という化石を買ってきましたが、なんとも神秘的な緑色で石のすばらしさを実感しています。

なるほど。石には人を魅了する輝きがあったり、素朴な落ち着きや力強さがありますよね。そういう「美」という価値は、我々碎石業界の人間は意識することがありませんでした。碎石は道路の下地やコンクリートの骨材として隠れてしまい、ほとんど姿を現すことがありません。また、採石切羽や工場も人目につかない場所が多く、産業として社会的認知度が低いように思いますが、どうでしょう。

そうですね。私はかねてから碎石業をK3（きれいな、かつこいい、高収入）職場に転換していきましようと思つてはいるのですが、今回のコロナ禍における感染拡大の防止と経済活動の継続という二律背反する事項の両立を考えると、碎石業の未来を考える上で重（裏面へ続く）



要だと考えています。他産業で「リモートワーク」が浸透してきている現在、「リモートワーク」こそが、砕石業の未来を考える上でキーワードではないかと思えます。砕石業は設備産業であり、重機作業、プラント作業における自動化、省人化の余地は大いにあります。生産性の向上が図られることで、これまでの砕石業のイメージを一新する「スマート砕石業」が実現できると思っています。

技術的には先生がおっしゃることが可能な領域に入っていますね。どう活用するかは、経営者や従業員の意識かもしれません。

業界イメージの向上は、採用活動に影響してくる話です。今の新卒学生は鉱山はさておき、砕石業を目指して就職活動をしているようには見えませんね。かく言う私もこの業界に入ったのはちよつとした偶然でしたから。

フクタさんには新卒者が2名いますよ。

はい、幸運にも棒を投げたら犬に当たったという感じでしたけれども、年々スキルも向上して頼もしい存在になってきています。

ただ現実には、昭和の時代では意識されていなかった人材育成のための教育研修費、省力化、安全化のための設備投資、環境整備費など間接部門におけるコスト増が悩ましい課題となっています。コストを売価に転嫁できることが重要と思いますが、
・・・高橋さん一杯どうぞ

砕石の価格は、お届けしてなんぼという持込価格なんですね。運賃がかぶさっているのが、商品の売価、原価、利益が分かりづらいですね。さらに公共工事の依存度が高く、設計価格が上限値というキヤップをはめられているので、メーカーとしてプライシングの権利が少ないことが、経営上の障害となっている気がします。

建設業を含めて関連団体としての課題ですね。

砕石は採取場ごとに岩質が違うので、品質や性能による価格差が認めづらいかもしれませんね。

そうですね。採取場ごとに地形、地質、岩質、表土厚が違うので、例えば、地形が急峻だと開発コストがかかるし、原石の硬軟によって製造コストが変わってきます。全国の標準が捉えづらいため、原価管理や売価設定は各社ごとの試行錯誤だと思います。

現場にいる人間にとって、お金の話になると息苦しくなってきました。砕石の製造原価の把握については「お手本」がないので成功事例を真似しても成功するとは限りません。自社で考えなければならぬ部分が多いと思います。

今日の南部美人は、桐箱入り純米大吟醸です。「お酒は飲みすぎる」とダメだが、適量？は脳を活性化させる」が持論の外園さん。どうぞどうぞ。

おお、ありがとうございます。

個人的に昨年は「はやぶさ2」が「小惑星リゅうぐう」から岩石サンプルを持ち帰りに成功したことが印象に残っています。石には生命の原材料を解明する情報が秘められており、改めて石の価値を再認識しました。



情報保存のカプセルとして石は優れてますね。2500万年前の旧石器時代の生活を蘇らせることのできるんですから。石器や化石という石だからこそ伝えられたのです。そういう意味で石は他の物質とは別格かもしれませんね。

古代の人は、石そのものを利用するほかにすでにコンクリートも製造できていたそうですね。

そうですね。当時から言わば「古代セメント」があって、固化や接着は可能でした。千葉大学の和嶋先生はこのセメント（ジオポリマーセメント）を研究していらっしゃいます。どういふセメントかという石炭灰などの産業廃棄物、ケイ酸ナトリウム、水酸化ナトリウム、水から製造され、石炭灰などの粒子の周囲に縮重合体であるケイ酸ポリマーを生成して硬化するセメントで、まさに古代セメントはこのジオポリマーセメントなのだそうです。ちよつと話がややこしくなってきましたが、要するに砕石業が抱える「砕石粉」や「脱水ケーク」の有効活用には生かせる技術ではないかということだと思います。

砕石の製造工程には、今のところいったん小さくしたものを固めるという工程がないですから、そういう技術が開発されれば歩留まりが向上して、資源の有効活用につながりますね。

今日お誘いをしてきましたが、残念ながら欠席となった岩手県採石工業組合の小田島さんからラインが入りました。他愛のないことですが、日本に山がある県、石がある県、岩がある県全て答えよ。だそうです。

山形、山梨、山口、富山、和歌山、岡山が山がある県で、石川が石がある県、そして岩手が岩がある県ですね。

一発回答ですね。(パチパチ)でも小田島さん何を言いたいのでしょうね。岩手の岩という漢字は山と石でできているから日本で唯一、山も石もあるということかな。

何かを暗示させるようなラインですね。やっぱり岩手県が業界のトップランナーをめざそうという意気込みですか。

ところで前から気になってたんですが、岩と石の違いって大きいですか？ 岩と石をくっつけ岩石とも呼びます。あつ、深く考えないでください。謎は謎でいいです。どうぞ召し上がってください。外園理論でいくとそろそろ皆さんだいたい脳が活性化してきたようですよ。

「未来」というキーワードで産業としての砕石業を考えてみると、課題が多く見えてくるわけで、それは逆に考えると伸びしろがあるということだから、課題解決の意志と能力が問われてくるでしょうね。最後に左右するのは人材かもしれません。

様々な分野で技術は進歩している訳で、それをどう組み合わせ活用するかが重要ではないでしょうか。今まで使えないと思っていた技術が使えるようになる可能性があると思います。それは社会のパラダイムシフトであったりもしますが、私たちの意識改革が問われるのではないのでしょうか。



改めて身近に石があるもんだなと感じるし、素材として考えても沢山使えて安くて丈夫なものを作るには砕石が一番適しているんですね。

普段は意識されないことや、課題として顕在化しているけれどもほったらかしにしていること。そんな身近なすぐ隣に未来を拓くishiがあるんじゃないですか。

そうですね。案外身近に未来を拓くishiがありそうな気がしてきました。

今回の200号記念バーチャル放談に関しては、事前に出席者の皆さんから蘊蓄のある非常に示唆に富んだ意見を文章でいただきました。放談という形式とさせていただけだったので、とても全部の内容を盛り込めなかったことをお詫び申し上げます。出席者の皆さんにはお忙しい中、寄稿いただきましてありがとうございます。

新年賀 2021



本年も何卒よろしくお願い致します

編集後記

新年あけましておめでとうございます。

昨年、喪中のはがきを出したところ、前の会社の上司がクリスマスはがきを送って返してくれました。貰ったのはがきの字を見たときにすぐに『〇〇さんだ！』とわかりました。別に特徴のある字でもないのですが、仕事でやり取りしているうちに、その人の字が私の頭の中に残っているんですね。『字は体を表す』ということわざがありますが、「字がその人を頭に思い浮かばせる！」意味は違うかもしれませんが、字がなんだか大切なもののように改めて感じました。私もお手紙を書いて送りました。常にLINEやメールの毎日。久々に『なんかいいな！』って思いました。